

2019/06/16

「苦しいときの神頼み」

教会に相談に来られる方の中で時折、「苦しいときばかり神様に頼って本当に恥ずかしい」「普段はクリスチャンらしい生活もしていないのに、苦しいときばかり神様に頼って申し訳ない」と言う方がいらっしゃいます。私はそのたびに、「苦しい時だからこそ、神様に頼れるんじゃないですか?」とお話ししています。苦しみの中でイエス様を頼ってきた病人に対して、イエス様はどのように答えておられるか、見てみましょう。

■苦しみの中で神を頼るとは

「そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通過した。ある村に入ると、十人のらしい病人が（ツアラアトに冒された人が）イエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。イエスはこれを見て言わされた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中でいやされた。

そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。

そこでイエスは言わされた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」

それからその人に言わされた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」（ルカ 17:11-19）

「らしい病」あるいは「ツアラアト（ヘブライ語）」とは、ハンセン病と呼ばれる、皮膚や末梢神経が冒される病のことです。この病は長い間、感染力が高い病だと誤解され、差別の対象となり、人々から隔離されてきた経緯があります。思うように体が動かず、皮膚はただれ、人々から嫌われ、隔離され、孤独を覚えていた彼らは、イエス様が近くを通られたとき、遠く離れたところから、「イエス様、先生、どうぞ、あわれんでください」と叫びました。「イエス様、先生」と言い換えて呼ぶということは、何としても、こっちを振り向いてほしいという必死さが表れています。

これはまさに、苦しいときの神頼み、苦しみの中からの神頼みです。この神頼みに対して、イエス様は、「お前たちは、自分が苦しいからと言って、私を頼るのか」と言われたでしょうか。もちろん、そんなことは言いません。イエス様は、彼らの叫びを聞き、彼らを見て、「行きなさい。そして祭司に見せなさい」と言いました。祭司に見せるのは、病が完治したということの承認を得るためです。その承認を得れば、社会復帰が許されました。彼らは言われたとおり、祭司の所に向かいました。するとどうでしょう。彼らが祭司のところへ行く途中、

その病は完全に癒やされてしまいました。奇跡が起きたのです。

さて、十人のうちの一人は、自分がいやされたことが分かると、大声で神をほめたたえながら引き返してきて、イエス様の足下にひれ伏して感謝しました。人から承認されたり、社会復帰できたりすることよりも、イエス様が癒やして下さった感動が抑えきれず、イエス様のもとに帰ってきたのです。イエス様は「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」と言われました。

1. 苦しいときは神頼みする

イエス様は、彼らの「苦しいときの神頼み」に対して、無視することなく、真っ直ぐに応えてくださいました。私たちも、彼らのように、苦しい時、ただ神に頼れば良いのです。

苦しいと感じる内容は人それぞれです。病の苦しみ、仕事の苦しみ、経済的な問題、あるいは、地震や天災、自然環境のことで苦しむ人もいます。また、人から誤解されて苦しんだり、対人関係がうまくいかずにつらくなります。

私達が苦しいと感じるのは、その出来事を通して、自分が否定されているように感じるからです。人は本来、神に似せて造られた良き者、肯定される者なので、ダメな者という否定を認識すれば、つらくなるように出来ています。

例えば、仕事で失敗した時、自分よりもできる人が周りにいたとします。すると仕事の失敗をきっかけに、その人と自分を比べて落ち込み、あるいは相手を妬んだり、憎んだりして苦しさを覚えます。実際の問題は仕事の失敗ですが、そのことを通して、人と自分を比較して自分をダメな者だと思ったり、人を裁いたりするから、苦しさは倍増していきます。

あるいは、自分の老いに対して失望した時、若々しくて健康な人がいると、それをうらやましく思い、比較して、自分はダメな者だと思ったりしてしまいます。そして、その人を妬み、何か欠点はないかとあら探しをしたりすることもあるでしょう。自分をダメな者と思ったことで、老いという失望に加え、さらに悪い思いにも苦しんでいくのです。

つまり、苦しみとは、単に表面的な出来事が問題なのではなく、自分をダメだと思うところから生じる様々な悪い思いによるものなのです。人は苦しみを覚えると、その苦しみから逃れたいと思うものです。それは、表の問題の解決を求めているようでありながら、実は、心の汚れをどうにかしてほしい、と叫んでいることに目を留めましょう。

さて、10人の病人たちは、「どうぞあわれんでください」と自分を包み隠すことなく、神様に助けを求め、癒されました。私たちも彼らと同じように、ただ神様に頼ればいいのです。何とか助けてほしい、そう祈るとき、心に平安が訪れます。「こんな汚い自分でも、受けとめてくれる方がいる」——その安心感に包まれるからです。神に頼ることを聖書は「神に立ち返る」と言いますが、私たちはただ神様に立ち返ればよいのです。

「ドラえもん」という漫画があります。「ドラえもん」は、「のび太くん」という何をやってもさえない少年を助けるために、未来の世界からやってきたネコ型ロボットです。のび太くんにとって、ドラえもんは最高の味方で、なくてはならない存在です。ガキ大将のジャイアンやスネ夫にいびられる時、のび太くんは、すぐに「ドラえもん」と言ってドラえもんの

所に立ち返り、どんなに自分がつらい思いをしたかを訴えます。すると、ドラえもんはいつもおび太くんに寄り添い、どんなに情けなくても、いつも味方になって助けてくれます。

私たちも同じように神を頼ればよいのです。神に頼る前にちょっと自分で努力してから、とか、こんな思いを神様に打ち明けては申し訳ないとか、いろいろな思いがわいてくることでしょう。しかし、そんな思いも含めて全部、ただ神様、と頼れば良いのです。自分の心に湧いてきた思いを、そのまま、イエス様のもとに持つていけば、神様は助けてくださいます。

2. 愛されていることを知る

癒された 10 人のうちの一人は、癒やされたことに気づくと、あまりの嬉しさに、祭司の承認をもらいに行く前に、イエス様のところに戻ってきてしまいました。社会復帰できることよりも、病が完治したことよりも、自分が愛されていることが分かったことに衝撃的な喜びを感じたからです。

苦しみとは、自分をダメな者だと思うときに覚えるものです。いくら病気になってしまっても、自分をダメな者だと思っていたり、比較して誰かを妬んだり憎んだりしなければ、それは苦しみにはなりません。つまり、この癒やされた一人の人がここまで喜びを覚えたのは、自分をダメな者だと思う気持ちから解放されたからなのです。

それまでこの人は、自分など愛される価値のない者だと思っていた。ところが、イエス様に助けを求めて癒やされることで、この人は「神様が、私の祈りに答えてくださった」という感動を覚えました。病になり、心の中までさんでどうしようもない自分であったのに、「こんな自分でも目を留めてもらえる」という神の愛に触れました。自分が愛されているということに気づくとき、人は苦しみから解放されるのです。逆に、どんなにうわべの問題が解決しても、自分が愛されているということが分からなければ、苦しみからは解放されません。神に愛されているという経験は、そのまま神様への信頼となり、神様と自分の関係を築いてくれます。つまり、この人が手にしたものは、神様への信頼だったのです。

同じように癒された他の 9 人は、残念なことに、自分の病気が治ったことをすぐに祭司に証明してもらいたい、ということだけに目が向いていました。せっかくイエス様に癒してもらったのに、イエス様への信頼を手にすることができませんでした。イエス様は、そのことを残念に思い、「他の 9 人の人はどうしたのか。」と聞かれました。ここで勘違いしてはいけないのは、イエス様は、「せっかく直してやったのにどうして他の人たちは戻ってこないんだ！」と怒っているわけではないということです。イエス様は、感謝してほしくて人を癒やすのではありません。ただ、癒やされた人に、神に愛されているという愛を受け取ってほしいと願っておられるのです。

私たちは祈る時、つい願いがかなったかどうかに心が奪われてはいないでしょうか。確かにそれは嬉しいことですが、その中で、神様に愛されているという神様への信頼を手にしているでしょうか。どのような祈りにも、神様は誠実に応えてくださる方です。願いがかなったかどうかだけではなく、神様が応えてくださったことを通して、神様に愛されているということに目を向けていければ幸いです。

イエス様の所に戻ってきた人は、病の癒しを通して神様の愛に気づき、感動を覚えて、神様の所に立ち返ることができました。こうして、この人の中に神様への感謝が増し加わりました。

イエス様は、こうした信頼を得させたくて、苦しいときには神頼みをするよう言っておられます。そして、この信頼を手にすると、いつでも神様に立ち返りたいという願いがわいてきます。こうして、神様と人との関係が築かれていくのです。

3. 神頼みは何度も繰り返される

さて、イエス様のもとに立ち返ってきた人に向かってイエス様は、「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」と言われました。これは決して、この人が信仰深いので直ることが出来たという意味ではありません。信仰というのは、神様の呼びかけに、私たちが応答することを言います。つまり、信仰には、まず神様の呼びかけが必要なのであって、人の能力によって生じるものではないのです。ここに登場した 10 人の病人たちは全員、イエス様が通るというその出来事を通して、「神様に求めれば何とかなるかもしれない」という願いが起こされ、それによって神様にあわれみを求めることができたのです。ですから、「あなたの信仰があなたを直した」とは、「あなたが私の呼びかけに応答したから、あなたは直った」という宣言です。これは、戻ってきたこの人だけに当てはまるではなく、本来癒された全員が、この言葉を神様から頂くことができたはずなのです。

この「直した」という言葉は、ソーザーというギリシャ語が使われていて、実は、「救った」という意味にも取れます。つまり、この人は、イエス様から「あなたが応答したから、あなたは直った」と言わると同時に、「あなたが応答したから、あなたは救われた」と言われたのです。この人は、このイエス様の宣言により、「救いの自覚」を手にしたということなのです。こうして、救いを手にした彼に対して、イエス様は「立ち上がって、行きなさい」と言されました。

ところで、この話は「こうして彼は、救いを手にして、立ち上がって行きました。」で終わる話ではありません。「立ち上がって行けば」、再び「苦しみ」に会います。その中で、また苦しいときの神頼みをし、イエス様に助けられて感謝し、信頼を増し加え、またイエス様から「行きなさい」と言われるのです。つまり、一度、イエス様に助けてもらったら、それで完成なのではなく、この神様と私たちのやりとりは、何度も繰り返されるものなのです。「苦しいとき」というのは、年に一度とか二度とかそういうことではなく、現実に目を向ければ、私たちはいつも苦しみにさらされています。ですから、いつも、イエス様に頼ることが必要なのです。

ルカ 17 章で、わざわざ重い病気のことが取り上げられたのは、私たちもみな同じように重病だということに気づかせたいからです。私たちの心は、比較や嫉妬、怒りや争いに満ちています。すぐにさばき、いつも心の中でいいとか悪いとか判決を下しています。口では良いことを言っても、心の中は手の付けようのない罪で満ちています。そうした罪は、私たちに苦しみをもたらします。ですから、自分の心を正直に見つめれば、常に苦しみがあり、イエ

ス様に頼るしかないように気づきます。

自分が、どうしようもない苦しみの中にいることを自覚したら、のび太くんが「ドラえもん」と言ってすがるように、私たちも「イエスさま～」と言ってただ神様にすがればよいだけです。苦しいときの神頼みでよいのです。